



TITLE:

ゴットフリット・ベンと詩の問題 (一)

AUTHOR(S):

野村, 修

CITATION:

野村, 修. ゴットフリット・ベンと詩の問題(一). 独逸文學研究 1958, 7: 49-69

ISSUE DATE:

1958-12-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/186267>

RIGHT:

ゴットフリート・ベンと詩の問題 (一)

野村 修

……ついになぜとは知らず、

ただひとつのものを指向する、

ばくときみの間隙の

永遠の忘却を……

ベン

一

ゴットフリート・ベンは、一八八六年、牧師の息子としてマンスフルトに生れた。醫學をまなび、皮膚病・性病の専門醫として生涯をベルリンにすごした。兩次の大戦の期間は軍醫だった。一九五六年七月七日、ベルリンで死んだ。

ベンの最初の詩作「モルグ」は、一九一二年にあらわれた。當時のかれがもっとも多くかわっていたものは、崩

壞しゆく病んだ肉體、解剖用死體、精神や生命の諸聯關から切りはなされた物質としての肉體だったろう。醫師としてのかれは、それらに接したとき、感情や價值判斷はぬきにして、冷靜に現象としての症候そのものに對處せねばならなかった。かれの眸は非情に、正確に、鋭敏になる。しかし醫師は同時に詩人だったのだ。かれは明晰な眸であるとともに、單に眸であることもできぬ。かれは對面するものによって自己の變革を餘儀なくされる。かれに面前する弱點や汚點を露呈した肉體が、そのとどめえぬ解體が、そのままにかれの内部にいいり、傷ぐちをひらき、有効な處置をもとめる。「あまい肉體性がぼくにひつつく、いわば口蓋のかさぶただ。體液やら、石灰質の骨にからんだ腐肉のどろどろやらが、ミルクや汗といっしょくたに、鼻へ舞いこむ。わかつてしまった、娼婦のマドンナのにおい、ある行いのあとの、朝のめざめの、また月經時の……」(G. 21)そしてここから、ものが見えてしまう眸と、痛苦に共振する全身とから、すでに一流の、かれの初期の詩がうまれでる。このとき詩とは、かれの剔出した患部、それはすでにかれの一部でもあるのだが、感情的なオマケがまったく排除しているから、誰の名を負うこともなく、痛苦をわめきたてることもない患部、である。人間の詩的症候學、といっていいかもしれぬ。

うつくしい青春

ながく葦間にねていた少女のくちびるには
 缺落のあとがいちじるしい。

胸を切開したら、食道は穴だらけ。

そのうち、横隔膜のしたかげに
 子ねずみの巢がみつかった。

かわいい子は死んでいた。

ほかの子たちが肝臓と腎臓を喰い

ひえた血を飲み

ここにうつくしい青春をおくった。

かれらにはうつくしい天折もおとずれた、

そろって水葬されたのだ。

ああ、かわいいくちがちいち言ったっけ！

(G.18)

これは「モルグ」連作のなかの一篇だが、ここにはすでにみごとな技法がある。たとえば語の用法についてみると W・キリイが指摘している(註1) とおり、うつくしい、青春、少女、したかげ、天折、などの「詩的」な語が、讀者の豫想をうらぎったしかたで用いられ、対象をと同時に慣用語法をも強烈に照明するにいたっている。だが根本的な魅惑は、あたらしい詩美を思いがけぬところから掘りだしたことをさえひとつの附隨的な結果と思わせるほどの、透徹した眼の所在を、感じさせるところにある。一九三〇年、K・マンはこう書いている(註2)、「ここには、強度に緊張した詩的で知的なエネルギーが、きわめて獨特な、微動だもせぬ表現をみいだしている。……熱烈さと、慘酷ないじわるさにもなる精密さが、ベンの文體の特徴をなす。……きめのこまかい優しい感情はぼくたちを、性病用の注射器によりはより多く文學にかかわってきたぼくたちを、動かすものだが、そんなものは、かれの周辺にはあらわれぬ。かれとくらべれば、ぼくたちはみな、どこかあわれっぽく、どこかあまやかされているようだ。」K・マンは實はベンの散文について書いているのだが、ベンの初期の詩がよびさます感動も、ほぼ同質のものといえよう。ぼくたちはぼくらの、あまえた視覚に對立する世界を、見せられる。たとえば「癌の病棟を男と女がおとる」(G.24)「わ

めく女たちの部屋」(G. 26) 「終末」(FL. 31) などを讀むとき。

ついでながら、「モルグ」に對する新聞批評は、例によって、いつでもどこでもヤジウマにことを缺かないことを立證している。一九一二年というと、「アクツイオン」誌の創刊の翌年であり、新しい抒情詩は、當時、かつこの擲揄の對象だったのかもしれない。たとえば、「まいった、なんてじだらくな、精神の純潔のかけらもない幻想が、むきだしにされるのか。徹底して醜惡なもののおぞましい愛着、畢竟やむをえぬものを暴露するたちのわるいなくさみ。趣味のふしだらさときたら、かの惡名たかい惡魔のミサやモンマルトルのらんちきさわざにも、ひけをとるまい」とか、「昔のキチガイには白いこまねずみのダンスが見えたが、若きベルリンは、この点において決定的な進歩をなしとげた、どぶねずみが見えたのだ。こんな倒錯したものをとりあげるのは、抒情詩の批評家の領分ではない。精神病醫に、この興味ある症例をおまかせする」といった調子である。ヤジウマとはたのしいものだが、ベンの詩が攻撃性をたかめてくるのに、こんな批評も一役かっているかもしれない。(註3)

事實、これにつづく時期の詩では、性急な嘲弄が、冷靜な觀察をしばしばあやうくしている。無責任な言いかたをすれば、もしベンが、病室や手術室に向けた鋭い眼を、さまざまな社會現象に向けて、さまざまな症候を具體的に剔出していったなら、ぼくたちはリルケの「新詩集」の、つぎの段階の詩集を、持ちえていたかもしれない。リルケは、ボードレールの「腐屍」に觸れて、「この怖るべきもの、見ればただおぞましいばかりのもののなかに、實在するものを、あらゆる實在にまさって實在するものを見ることが、詩人の課題だったのだ。撰擇もありえず、拒否もありえない」(註4)と書いたが、結局のところリルケは、究極の凝視を回避して、いかにもドイツ的な「轉回」をしてしまったようにも思われる。無責任な言いかたをつづければ、「實在」(das Seiende) と言って「現實」と言わぬところがドイツ的なのだろうが、ベンもまた、現實をすてて實在へのあてどない放浪に旅だつてゆく。むしろここにも、きびしい、眞實な道はある。

「モルグ」連作にあらわれる技巧や冷たさは、現實にうちあたって破産しかねぬ感受性を保護する、必然の衣裳だった。だが衣裳は、しばしばひとり歩きをしたがる。いちど刻苦して形成された文體は、自己發展をして、詩人を世界からひきずりだす。たとえば「肉」という長詩は、語法こそみごとだが、いたましい饒舌にすぎぬ。嘲弄は空轉し嘲弄によって世界からはじきだされるのは、嘲弄している當の詩人だ。詩人というものがころんでもただは起きない人種でなかったら、ここで一卷の終りということになる。しかし、詩人とは、失敗から意味を汲みだす、しばしば一面的な意味だが、一面の徹底した眞實を汲みだす、という特性をもつ人種だ。一九二〇年、ピントゥス編の「人類の黄昏」をもって、ベンとほぼ同時に出發したドイツ表現主義抒情詩は、いちおうの結着を告げたと考えられるが、その一翼とみられたベンも、一九二〇年の前後、かれの第一期を清算する。清算からは、かれにはこんな結果が出る。

シンテエゼ

沈黙の夜。沈黙の家。

だがぼくはなおしずかな星の一族、

ぼくもまたみずからの光を

みずからの夜のなかへ放射する。

ぼくは腦髓のもとへ回歸してきた、

洞窟から諸天から汚物から畜類から。

おんなの身にのこされたのも

くらく、あまい、オナニばかり。

はくは世界を轉がす。獲物に喉をならす。

夜には幸福に裸身をさらす。

死の苦悶も、汚辱の惡臭もばくを、

自我概念を、世界へ引き戻しはしない。

(G. 67)

二

一九二〇年、ベンにおいてぼくたちは、ひとりの現實の證言者をうしなつたが、代りにひとりの自我の證言者を得た。この轉換の過程には、ちょうどかれの詩の語から語・行から行への移行のばあいとひとしく、連續と不連續の要素があるように思われる。にわかに推斷しがたい點があまりにも多いが、いくつか、連續的とみえる要素をひろつてみよう。そのひとつは、すでに「モルグ」連作の成立過程に内在していた。かれ自身の報告によれば(D. 43)、連作の全體はある夕べに書かれたのだが、その時刻のまえにはわずかな豫感さえなかったという。詩人は、もし詩作過程に意識的な檢證の眼を向けるなら、脳髓という不可解な器官の作用に、不可避免的に面接しないわけにはゆかない。またひとつは、かれの初期の詩において、人間がしばしばその弱點ないし汚點とだけ同一化され、他が捨象されていることである。たとえば夜のカフェでは「みどりの齒、顔じゅうのにきびが、眼のふちの炎症にウィンクする」し、「髪の毛をはやした脂肪が、扁桃腺をむきだした大口に話しかける、頸のまわりには信と愛と希望」(G. 28)というふうだ。この表現はたくみであり、ひとつの手法として教えられるところが多いが、もしこの一面が視野の全面を

蔽ってきて、いわば弱點一元論になり、對照を豫想するフモイルをうしなえば、たとえば「アラスカ」連作(FL. 39)の一部に散見するような、いかにもニイチェとフロイトの亜流めいた安易な絶望調へ、おちいる危険も多いにちがいない。この絶望調をうらがえせば、非現實への憧憬と、自我へのおおげさな遁走になるはずだ。

とはいえ、このようなばくのうすぺらな感想などとはかかわりなく、ベン(Ben)の詩は、二〇年代から三〇年代にかけて第二期の、みごとな言語形象をきざみだす。この時期には、詩と並行して詩論もいくつか書かれている。まずそれらに即して、ベンがどういう詩を、どういう立場から書いたかを考えよう。この時期の詩もたしかに魅惑的である以上は、かれの詩や詩論の現實との連續・不連續が考察されねばならないわけだが、おそらくその考察は、かれの初期と第二期との連續・不連續をも、間接に照明することになると思われる。

DER SÄNGER

Keime, Begriffsgenesen,

Broadways, Azimut,

Turf- und Nebelwesen

mischt der Sänger im Blut,

immer in Gestaltung,

immer dem Worte zu

nach Vergessen der Spaltung

zwischen ich und du.

Neurogene Leier,
fahle Hyperämien,
Blutdruckschleier
mittels Koffein,
keiner kann ermessen
dies: dem einen zu,
ewig dem Vergessen
zwischen ich und du.

Wenn es einst der Sänger
dualistisch trieb,
heute ist er Zersprenger
mittels Gehirnprinzip,
stündlich webt er im Ganzen
drängend zum Traum des Gedichts
seine schweren Substanzen
selten und langsam ins Nichts.

無數の胚種、概念發生過程、

プロオドウェイ、天の方位角、
競馬場の、霧の構成、
これらを血に詩人は溶かし、
つねに造形しつつ、
つねにことばを指向する、
ぼくときみとの間の
断絶の忘却をもとめて。

神経繊維の豎琴、

あおざめて血はたぎり、

カフエインのため

亂れる血壓、

ついになぜとは知らず、

ただひとつのものを指向する、

ぼくときみとの間隙の

永遠の忘却を。

二元の生を

ひたすらにいとなみきたり、

きょう、かれは脳髓の原理に即し

碎破する者、

毎時、全面に活動しては

かれのもろもろの重い實質を

詩のゆめへ驅りたててゆき、

ときに、ゆるやかに無のなかへ没する。

(G.71)

どうにも譯せないので、原文を添えておいたが、ここに見られるような、八行の、伸縮自在の彈力的詩行をもち、押韻する詩節は、二〇年代から三〇年代にかけてのベンに、特徴的なものだ。全詩集に一九二二——三六年の作品として収められた七九篇のうち四七篇がこの形式だが、しかも四七篇の全部が交叉韻をふんでいる(生涯をつうじても交叉韻以外の押韻詩は數えるほどしかない。とくに意味はないのだろうか、みようだ)。

この時期のベンの詩の文體については、C・アインシュタインの解説がある(註5)。ベンの詩では「ほとんど分離されず、つきからつきへと名詞が連續し、根源的狀況の、觀念聯合の輪廓をえがく。逸話的、機会的な個々の事象をではなく、典型をえがくのだ。詩は短縮され、説明は棄てられる。措辞法においては停止し斷絶しつつ、内容においてはまったく潛勢的にとどまる。……」ばくの臆斷からこれを補足してくりかえすと、特徴的なことはまず、接續詞・動詞・形容詞の、おおはばな脱落である。これによって、詩から具體的・個別的・時間的な成分が揮發し、短縮された緊密な言語空間の内部に、さまざま抽象的なイメージがもつれあう。それらのイメージは、措辞法からも、たがいの意味あいからも、たがいに分離しているのだが、一方、流動的なリズムをもつ詩行と韻とが、それらをちか

らずで結びつけてしまう。ここに生れる緊張が、すなわち擴散する内容を形式が集中させ、ちからのあやうい均衡を生みだしていることが、かれの詩の特性となる。そしてイメュジが抽象的であるためにその作用がいちおう潛勢的であることは、リズムの流動をたすけ、イメュジの多様な集合がすみやかに展開されるのをたすける。

ついでに言えば、名詞の連續による多元的な形象空間の構築だけが、この時期を一貫しているわけではない。たとえば「なおはるかな道を経つ」(G. 119)や「はるけさから、ゆたけさから」(G. 123)などは、形象空間は徹底して稀薄にされている。動詞が逆に多用されて、ゆるやかな連續的なたちのリズムをつくりだすが、それも形象性のとほしい、單純な動詞ばかりだ。この空間は、支えのない、むなし、悼みと同化した愛の空間である。この稀薄化した愛の空間は、無關聯の形象のひしめきあう、無形相の(だから外的ともみえる詩の形式が重要になる)情緒空間と、うらがえしのものかもしれない。

C・アインシュタインの解説に歸ろう。「名詞の幻覺的な連續の結果、因果的な結合が回避される。類推は自由に直接にはたらきあい、その中心を自我という生命主體がづらぬきはしる、作用し感受する統一原理として。因果的連鎖の合理性ないし疑わしい目的性が消え、同時的なヴィジョンのうちにさまざまな要素があいつまる。それぞれの名詞は抒情の精神のさまざまな視野をしめす。」だから「詩はペンにとっては機會のためのものではなく、かれの情緒は逸話として規定され轉換されはせぬ。堅固な心性がみずから對象を生みだし、ちからずくで見られた世界を作ります。かれの詩は幻覺的なエゴイズムのあかしだといってよい。」

三

引用した詩に歸ろう。

「無數の胚種、概念發生過程、プロットドウェイ、天の方位角、競馬場の、霧の構成」

ベンによれば、現代はあらゆる思想が相對化した時代だ。人格もまたさまざまな要素に分裂し、人格は觀念の劇となる(たとえば、ハメエレンのばあ——Fl. 105ff)が、この劇は劇的でない。おのおのの觀念ないし情緒のあいだには有機的統一を形成するための確かな關聯性がないから、相剋さえが形相をなさぬ。かつてにそれぞれに、幼く、老い、叫び、黙し、迷い、命じ、生長し、くたばる。人格の統一とは脆弱なものだ。

ベンによれば、「精密に時を規定すれば」(以下 E. 163—179)時代は科學の世紀である。そしてそれはどう動いているか。自明と思われたユウクリッドの體系は、非ユウクリッド幾何學の出現によって、絶對性をうしない、相互に結びあう諸定義のひとつのあつまりとなった。力學がニュートンにより確立され、エネルギー恒存の原理がヘルムホルツにより確認されたのちに、時間空間とは剛體の相互關係のシステムであるとする學說、偉大な相對性理論があらわれたが、これと量子論力學とのあいだには、綜合をこばむ難問がある。進化論は、創造説をくつがえして人類の優位と發展への希望をちからづけたが、無慈悲な研究者は、現在、猿は原初的なものを多く保持しているほど人間に近いといい、發展の概念をうたがわしくした。更に、深層心理學が底しれぬ無意識界の存在を暗示し、原始人類學が論理的心性とは別の思惟形態がひとしい正當性をもって實在しうるし、また實在していることをあきらかにした。經濟學說もまた動搖している。「右翼から左翼から、隱喻めいたうそっぱちが語られ、西から東から、ユウトピアのだからが語られる。」

かつて體驗すべきものだった世界は、認識すべきものに轉換された。そして認識の道そのものがおそるべく複雑化してきた。思想の相對性とは、だから、否定したり回避したりすべき筋合いのものではなく、現代に必然のもの、歴史の流れの前むきの究極の所産なのだ。プロオドウエイから天文學にいたるさまざまな事象が、同時に、現代の頭腦のなかにひしめている。

「これらを血に詩人は溶かし」

ペンによれば、藝術家と文化人とは區別されねばならない (D. 56)。文化人は、すでにあるものに手を加え、ゆたかにし、仕上げる。かれは歴史を信じ、實證主義者で、かれの運動は連續的である。それに對し藝術家は、動きにかかわらず、非社會的で、前後を見ず、内部のものにのみかわる。内部のものがついに放電するにいたるまで、内部に印象をあつめ、内部においてはたらく。そして、小説家には文化人の要素がまじるのに對し、詩人は徹底して藝術家なのだ、という。

詩人の偉大さが存するのは、かれが社會的前提にとらわれることなく、一個の裂目に耐え、みずから裂目そのものの言葉になる、という點である (E. 171)。かれは、ばらばらに分離した文明を、自主的な表現能力を喪失した類型を、分析され平均化されたところを、快樂に耽る性を、神經症への遁走を、もろもののハッピーエンドを、通過して、論理體系の崩壊し去る地點に至らねばならぬ。いわゆる前論理的心性と触れあう領域にまで。なぜなら、「認識は、無知と比較すれば、少くとも對象を所有している。しかし前論理的心性の現實である同化 (Partizipation) と比較するなら、認識による對象の所有は不完全であり、外面的である。」 (E. 172) (註 9)

「つねに造形しつつ、つねにことばを指向する」

しかし現代ヨーロッパの頭腦は、單なる前論理的心性ではありえない。かれは認識の道の涯に立ち、非情の眼で世界をみつめる。かれが同化をよびよせるのも、認識の道をはなれてではないのだ。このときかれは、たがいに矛盾しあるいはたがいに妥協する思想の渦のなかに立つ。そしてペンは、そこからの脱出路は「世界を概念に轉換すること」にしかみいだされぬ、と考える。 (D. 58) これが、かれの基本的な撰擇である。

かれの概念 (Begriff) という語は、あまやかされたニュアンスをもたぬ。「概念をつくりだすのはきびしい作業だ。過去に對する巨大な責任の負荷を負い、關聯や實狀についての異常なまでの知識と無量の直觀とを驅使して、ようやくそれに近接し、その眼光を認めることができる。概念は刻印しつつ解明する。それは客觀的精神なのだ。」 (D

(63) だからかれは、概念という語を、「集中された體驗」(D. 62) と言いかえもする。個々の事象は一面的なものだが、その多くがしだいに集中し、全面を包含する堅固な形象をきずくとき、その核が概念に、語 (Wort) になる。この過程は内的には抽象、外的・現象的には造形・詩作にはかならぬ。

「ばくときみとの間の斷絶の忘却をもとめて。」

「もとめて」と譯したのは強すぎる。原詩では方向がしめされているにすぎない。この二行については、つぎのペンの文章をあげておく。さきほどの、前論理的心性へ、同化への志向に直接に關聯している。

「自我 (das Ich) とは、自然にたいする比較的あたらしい規定、のみならず一時的な規定である。内部と外部とは、近代になってようやく分離されたものであり、ある種の特殊のコントロールをもつ精神にあつては、精密に分離されているとはいいたい。」「しかしこの自我の内部に、用途もなく歴史もなく、くらい愉悅をはらみ、徹底して無意味に、無數のコムプレクスがあつまるのだ。暴力の粗野な重壓にひしがれ、便宜的心理學の茨の冠をかぶせられ、工業の高度の産物にかこまれ、博愛的な諸理想のひしめきのあまりに抑壓神經症になり、性衝動にとりつかれたこの時代、この時代のさなかから——自我は苦惱しつところ (die Psyche) の基底部への道を辿り、涙ながらに太古の潮を呼びよせる」(E. 173f.)

「神經纖維の豎琴、あおざめて血はたぎり、カフエインのため亂れる血壓」

詩人が感じやすくなければならぬのは當然だ。ペンによれば、生命はよびさまされる (proviziert) ものである。ことにペンのばあい、どういふふうにして來るのかはわからぬが、生命が「名詞」によってよびさまされる瞬間がある。名詞とは、民族による數千年の、また個人による生涯の、概念の集中過程を経てきている語である。語に集中された無數の體驗が、思いがけなくあふれだし、幻暈となつてかれをつつむ。「言葉、言葉、名詞。それが翼を擴げさえすれば、數千年がそこからこぼれる。植物・地理・民族・国土、歴史的體系的にはかくも捉えどころをなくした

あらゆる世界が、ここに花ひらき、ここにゆめとなり——精神のすべての氣紛れ・憂愁・絶望が、概念の斷層から、いきいきと感覺的にたちあらわれる」(D. 46 f.)

だが幻量のなかでも詩人は、つねにめざめていなくてはならぬ。かれはゆめを熱烈にそして精密に、涯もなくそして正確にゆめみるのだ。神經であつて豎琴、血がたぎって蒼白。このばあい、いわば豫定調和としての詩形の存在がかれをたすける。詩人の意識・批評・技術が、これに應えねばならぬ。

「ついになぜとは知らず、ただひとつのものを指向する、ばくときみとの間隙の永遠の忘却を」

詩人のいとなみの理由は、ついに誰も知らない。ベンによれば、詩人と社會とは直接の關係はない。詩人は社會に影響をおよぼしえず、また社會の影響に對しては身をとざしている、とベンは言う。「餘人ならば、後代の事象を語り、一時的な諸關係を敘述し、たちまち分解する諸問題を論ずるのもよい。しかし、かの神祕的同化はもはや存しないにもせよ、その綜合力への追憶は永遠である。詩人はくりかえしあらゆる時代に回歸してくるだろう、かれにとって生とは古くまた新しい基底部からの聲であるような、そのような詩人が。かれにとって、いっさいの過ぎゆくものは、ある未知の原體驗、かれの内部に追憶となつてよみがえろうとする原體驗の、比喩にすぎない。」(E. 179)

創造性は、文化現象とことなり、なにか非常識のニュアンスをもつ。

「酔いの高潮」(G. 72)には「間隙の忘却」が表現されている。

酔いの高潮、

自己滅却に、ゆめにいろどられ、

おお絶對、

ばくの腦髓をつつみ、

多くの苦闘のまことなり、

たましいの識る

深い内部の事象に

價値をあたえる。

絶えて眼の測度しえぬ

星辰のめくるめきの裡、

死をも忘却させる

夜々、したしいもの、

ひとつに溶けあう諸時間の裡、

創造の呼びごえにつつまれ

合一はきたり

ひき浚い——去る。……

「二元の生をひたすらにいとなみきたり」

二元的という語から、のちの二重の生という語を思いだす必要は、さしあたっては、ない。プロオドウェイにも天文学にも關心する在り方、人格の複雑な構造を、思いあわせておけばいい。同じ時期の詩「全面」(G. 191)から補足すれば「陶酔のうちに一部が、一部が涙のうちにあった」のだし、「かれはきみを苛酷に、これは温和に見た、かれは秩序づけるものを、これは破壊するものを、だがかれらの見たものは半面のすがただった。」

「きょう、かれは腦髓の原理に即し碎破する者、毎時、全面に活動しては、かれのもろもろの重い實質を詩のゆめへ驅りたててゆき」

詩人は事象や概念を碎破し分析して、それをあらたに概念に、確かな「フォルム」に再構成する。ニイチュによれば、「藝術家であるためには、すべての非藝術家が形式と呼ぶものを、内容として、ものそれ自身として感覺する要がある」(註7)という。「詩」とはフォルムだ。ということは、非藝術家の見地からすれば、それは遊びであり、無用の長物であり、オマケであり、「ゆめ」にすぎぬ、ということでもある。しかし藝術家にとっては逆に「内容とはまったく形式的なあるものとなってしまふ——生活をもふくめて——」のであり(註7)、かれは「ゆるがぬ形をとって完成がかれを凝視する」まで、「諸形象の氾濫のなかに」(G. 147)活動をつづけるが、このばあい、諸形象、いわゆる内容は、完成されるべきフォルムにくらべれば、實體性を持たない。詩が實體をふくまぬなら、この意味でも詩は「ゆめ」といいいい。「たとえばヘルタアリンの詩は實體をもたず、無に近く、語られず語られえぬ秘密の核をやどした衣裳なのだということ」は、非藝術家にはけっして理解できないことだろう(E. 126)とベンは言う。

「ときに、ゆるやかに無のなかへ没する。」

この一行は兩様に解せるように思われる、すなわち、肯定的に解すれば絶対への没入であり、否定的に解すれば無意味への陥没である。だがこの兩者は同一の感情の兩面だといえよう。「フォルム」は、あらゆる確信にうらぎられて反綜合をえらぶ詩人の、ほとんど唯一の確信となるが、それもつねに動搖せずにはいない。それは、詩の實現をつうじ、刻苦してあやうさを抑え、くりかえし定立されねばならぬ。微動だもせぬ確信などは盲信にすぎまい。だからベンの歌からは、歎きと矜りとの二重和音がひびく、なぜなら「きみ(詩人)の所有とは、ゆめ、まどわし、いつかゆめに酔いつつ、きみは地に碎け去るガラスの顔」(G. 181)なのだ。あらゆる意味を喪失した詩人にとって、はかなさは、最後の據點である詩へも浸透してこずにはいない。あらゆる認識には終着點がない、それは永遠に途上にあ

る。ときに一篇の詩が成るにしろ、それが虚無の上に架けられた橋ではないと、誰が知ろうか。

四

以上、一九二〇年代から三四年までのベンの詩と評論をつぎはぎして、當時のかれの詩観らしいものを構成してみた。不手際に混亂しているのは、多くの非力のせいである。さらに不手際に要約すれば、合理主義・機能主義を基盤とする市民文化に對立するものとして、絶對化された藝術が考えられている。このような藝術観は、しかしベンに固有のものではない。ベンにおいて特徴的なのは、獨白性へのいちじるしい傾斜だといえようか。

ことばには、實用性||傳達機能と、呪術性||美的機能の、二つの側面があるのは周知のことである。しかしこの、ものの「全面」を見、「全面」を把握しようとする詩人は、ことばの前者の側面に思いをひそめることをしなかった。かれによれば、ことばはすでに「人生の寫し、人生の表現であることをやめ、現實をはなれ、現實に仕えず、いまや存在のメタフォアとしての緊張そのもの、完全な自立存在となっている。文字や發音の背後には、ラディカルな形而上のちから、創造的なちから、ものを名ざし、ものを呼びださぬにおかぬちからがあって、このちからにのみ詩はかわる」(R. 28)

この面からいえば、かれの詩と詩論は、ことばの呪術性の高度の驅使によって、現實と連續する。しかしその一面のみが切りはなされて自立するなら、つねに、現實との不連續におちいる危険がある。虚偽がしのびこむ危険が。

詩が自己完結性をもつことは、詩の内容とは、本來、かわりがない。しかしそのことから、詩がいわゆる現實的な内容をもたぬ、と結論するならば、一面的だろう。ベンは、いわゆる時代の現實を題材とする詩人たちを揶揄して「かれらが使用者側と労働者側のどちらに近いかに應じて否定的にか肯定的に、鐵道敷設や熔鑄爐がうたわれる。どっちみち詩の支柱は氣分か信念だ。だから現實的な内容がおそえものとして必要になる」(E. 126)と言っている。

事實そのような、現實が氣分や信念のおそえものにつかわれた、詩でない詩が氾濫してはいたらう。だが現實的な内容が詩的現實となつてあらわれることはありうるし、實際に、すぐれた詩とはそういうもののだ。

ただベンのはあいには、詩的現實となつてあらわれる現實の内容が、閉鎖的な、分離し孤立し獨白する頭腦の現實に局限されている。對話性という詩のひとつの屬性が稀薄にされ、詩作は自我の孤獨なひとみとなる。この見地からかれの初期の詩をふりかえれば、初期の詩は「まだ」外部のモチーフの刺戟を必要とした、という判断が出てくる(註8)。たしかに、初期の詩でさえすでに、ほとんど對話性をもっていなかったとはいえる。しかしばくとしては、初期のいくつかの詩では、外部のモチーフが、詩的現實になりえていることを、否定できぬと思う。この點で、ぼくは初期と中期とは連續と不連續とがあるという感じをぬぐいきれない。この不連續が、表現主義の高潮と退潮という文學史的事實とどう關聯するか、まだぼくにはわからない。

いずれにせよ、詩の純粹性の追究が、しばしば現實との不連續を結果することは、ベンに特有の現象ではない。詩はことばの所産であつて、ことばを駆使する技巧を前提することは當然である。そして技巧というものが、ある意味で現實を虚構に投げかえすことも必然である。しかしこのことこそが詩の特性なのであつて、現實と虚構との緊張、現實性と技巧性との同時存在が、ことばによって構成されるとき、詩は詩の名にあたいする。現實の喪失は、技巧の不在とともに、詩を詩でなくしてしまう。そして詩における現實とは、いわゆる内的な現實にはとどまらない。そして、眞實な内的現實も、それがいわゆる外部の現實ときりはなされて、單性生殖をはじめならば、虚偽の侵入する危険がつねに存在する。ベン危険はここにある。

ともかく、ベンは、詩を歴史的ないし社會的な關係から問題としたことはなかったし、そのようなことには反感を抱きもしたるうが、言語表現のあらたな可能性をこころみ、可能性を實證してゆく面では、ベンはつねにラディカルだった。まずこの後者の面があればこそ、二〇年代において、いくつかの尖鋭な頭腦が、かれに惹かれてもいったの

だろう。また、知性と非合理性との同時存在は、すぐれて時代的な現象でもあったのだと思われる。ベンの詩論は、今日のぼくたちには、一面のふかい眞實をふくみつつ、しかもあまりに一面的と見えるが、詩論というものはしばしば、あるいは同時代の共通の前提を沈黙のうちにふまえ、あるいは同時代の相反する意見を沈黙のうちに豫想することによって、はじめて現實的な意味をもつものだ。知性とともに内在する人間の非合理的な要素を意識することは、當時のおそらく時代的な要請だったはずである。

しかしその要請は、時代の要請の「一面」だったこともたしかだ。措辭法を比類なく驅使してつくりあげられたみごとな詩形は、たしかにその一面にこたえ、自我の眞實な證言となつてぼくたちの手に残されたのだが、それと同時に、「ぼく」と「きみ」をもたぬ一面的な自我の自己發展の危険の、すぐれた證言ともなつてゐるはずである。あらゆる意味が相對化し没落する地點に立つて、ベンがえらんだものは、「ぼく」でもなく、「きみ」でもなく、肉體でもなく、人間關係でもなく、對話性と自立性とをあわせた十全な意味の「ことば」でもなく、「フォルム」だった。「フォルム」をえらぶこと自體には、異論はぼくとしてはない。だがフォルムはことばによつて(詩人には)實現されるものである以上、ことばの對話性＝實用性の無視は、おそらくいつか破綻せずにはいられない。ぼくはあらためて、かれの詩論を綿密に檢證してみようと思う。

(未完)

附註 ベンからの引用は左記による。

D=Doppelleben. 2. Aufl. Limes Verlag, 1955.

E=Essays. Limes Verlag, 1951.

Fl.=Frühe Lyrik und Dramen. Limes Verlag, 1952.

G=Gesammelte Gedichte. Limes und der Arche Verlag, 1956.

R=Reden. Langen-Müller Verlag, 1955.

- 1) Walther Killy: Wandlungen des lyrischen Bildes. Vandenhoeck Verlag, 1956. S. 108ff.
- 2) Klaus Mann: G.Benns Prosa. Die Literatur, 32 Jahrg. Heft 4.
- 3) 新聞批評は Kurt Schumann: G. Benn. Verlag Lechte, 1957. S. 37 による。
- 4) Rilke: Ausgewählte Werke. Insel Verlag, 1951. Bd. 2, S. 66.
- 5) Carl Einstein: G. Benns Gesammelte Gedichte. Neue Rundschau, 1927, S. 446—8
- 6) Lévy-Bruhl がいくつか引用したものの Partizipation の意味については、レヴィ・ブリエール「未開社会の思维」(山田沢、岩波文庫)を参照してほしい。
- 7) Nietzsche: Der Wille zur Macht. Kröner Verlag, 1952. S. 552.

なお、詩はフォルムだ、といふとき、ベンはもちろんに、たゞは近くはゲオルゲにあらわれたポドレエル以後の詩の流れを意識している。「ゲオルゲによせて」(R. 25 ff.)を参照してほしい。

- 8) Carl Einstein: a. a. O.